HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域の開放と持続可能性を両立する地域創造モデルの提案 ： 京都府網野町琴引浜のケーススタディからの分析
Author(s)	敷田, 麻実; 末永, 聡
Description	漁業経済学会第49回大会. 平成14年5月25日～平成14年5月26日. 東京都 要旨の出典：2002年漁業経済学会第49回大会報告要旨集. p.9
Issue Date	2002-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35575
Type	conference presentation
File Information	1188_abst.pdf, 要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域の開放と持続可能性を両立する地域創造モデルの提案
－京都府網野町琴引浜のケーススタディからの分析－

敷田麻実（金沢工業大学　環境システム工学科）
末永　聡（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科）

1. 研究の目的

沿岸域の多元的利用が進み、さまざまな形態の沿岸域利用が普及した現在、産業的な沿岸域利用である水産業による一元的な沿岸域の管理は難しくなっている。また現在は、地域の環境や資源・生態系を地域外からの利用者が利用する機会が増えている。そのため、地域における沿岸域の管理であっても地域外利用者の存在を無視できなくなっていることは、遊漁問題などの例を見ても明らかである。

このような状況の中で、地域の環境や資源・生態系の利用を持続可能にするという点には社会的合意が形成されつつあり、地域外の利用者の増加への対応と持続可能な利用へのシフトの両課題を、沿岸域の管理において同時実現する必要に迫られている。しかし現在までのモデルでは、地域外の利用者の増加はそのまま地域資源・環境への負荷の増加であり、この二つの課題の同時実現は難しいと思われていた。

そこで、本研究では京都府網野町琴引浜でのケーススタディに基づき、本来であれば地域外からの来訪者の受入は地域にとっての負荷にしかならないというモデルに代わる、地域外からの来訪者の知識を生かしながら地域における沿岸域の持続可能な利用の両立を実現する沿岸域管理モデル（敷田・末永の CONP サーキットモデル）を提案する。このモデルでは、地域の内外の関係者が持つ知識に注目し、その知識をネットワークの形成によって活用し、そのネットワークから社会的学習によって新たな管理ルールを生み出すことを想定している。

2. ケーススタディ（京都府網野町琴引浜の海岸管理の事例）

京都府網野町は京都府の日本海側に位置し、日本でも数少ない鳴き砂の浜、琴引浜を有することで有名である。鳴き砂海岸は網野町の天然記念物であり、その鳴き砂は清浄な海岸環境があってこそ音を発し続けることができる。調査はこの鳴き砂海岸の保全を進める中心となっている「鳴り砂を守る会（以下「守る会」）」を対象として行った。

琴引浜の地域住民が当たり前だと思っていた鳴き砂現象を、来訪した地域外の研究者三輪氏が認め、たびたび来訪する中でその価値を指摘した。そして開発問題による危機感などが契機となって地域住民の保全意識が高まり、守る会が結成された。それ以降も、琴引浜には地域外からのボランティアや専門家、支援者が連続的に訪れ、守る会の保全運動と協働してさまざまなイベントや調査、そしてその報告書などの発信活動を進めている。

琴引浜ではタバコの吸い殻の影響だけでも砂が鳴かなくなる。そこで海岸を禁煙にしようとする動きが起こり、それは最終的に「網野町美しいふるさとづくり条例」として結実する。その際にも、琴引浜に関与する地域外の利用者や関係者が協力・協働し、条例という具体的な形に結びつけている。そしていったんこのような形が見える（コンセプトになる）と、網野町の外部からもその努力や工夫が認識できるようになり、それによって事前に網野町の環境保全に対する姿勢を学んでから来訪者が来るという効果も期待できる。

3. 結論

以上のように、地域外の利用者が地域をたびたび訪れ、利用者が持つ知識が地域で開示される（「店を開く」）と、地域の関係者も含めたネットワークが形成される。その協働から新たな形が発信され、それが外部から評価を受けて認められると、それを学習してさらに新たな知識を持った関係者が地域に現れる（訪れる）。このように地域外の利用者の知識を有効に活用しながら学習によって沿岸域管理を進化させる仕組みを、本研究では右図のように整理した。

